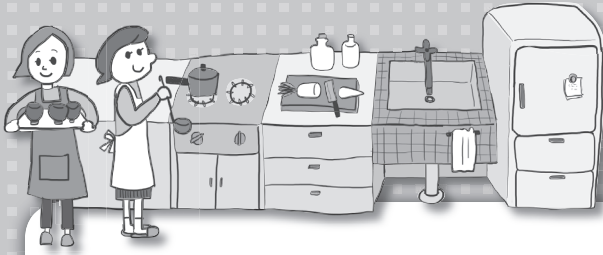


## 助産師の台所から②

## お里が知れる

しづや助産院 院長 澁谷貴子



お産が終わったママたちは、かわいい我が子と幸せな時をゆったりと静かに過ごしている。

助産院のいつもの光景である。質の良い母乳を出すために、産後の回復が良くなるように、入院中の食事は吟味して出している。その料理をおいしく盛りつける食器も、色とりどりに楽しめるものになっている。ママたちの心を豊かにすることは、とても大切なことである。

食事後の片付けを実習の学生がすることもあるが、陶器と鍋の蓋やフライパンなどを全部一緒に食器乾燥機の中に入れてある。そのたびに、私はお皿が割れはしないかとヒヤヒヤする。

私の祖母は、陶器を集めるのが趣味だった。私は子どもの時から、きれいな食器に囲まれて育った。母もまた姑に習い、食器には凝っていた。母はいつも「食事はその家の文化」「料理は芸術」と言っていた。

私が中学生の時だった。茶碗洗いを手伝っていた時のこと、洗ったお皿とステンレスの鍋を同じ籠の中に入れて、母にひどく叱られたことがある。「こんなことをしたら、大切なお皿が割れてしまうわよ。どうするの？ もう二度と手に入らない大切なものもあるのよ。こんなことをしては『お里が知れる』というものよ」。

心を込めて料理を作り、その料理が最も美しくおいしく感じられる演出をするために、器にも心を配る。相手をもてなすということの根本を母は教えてくれていた。特別な日ではなく、毎日の食事だからこそ、気配りをするだけで、自然と心のゆとりも生まれていたのだろう。

小さな子どもがいる家庭では、割れない食器をあえて使う。割れるとけがをして危ないという心配もある。子どもたちは毎日毎日、同じ食器でご飯を食べる。母親は、いつから割れる食器を与えるのであろうか。いつから食器が割れるものであることを教え、音を立てて食べてはいけないと子どもたちにしつけをするのだろうか。

助産院が開院する時、育児サークルのママたちから、お祝いにビードロの手作りガラスのコップのセットをいただいた。手に取るとずしっと存在感があり、ガラスの厚みに職人の温もりを感じた。「助産院に来る子どもたちに使ってね。子どもたちは良いものは分かるのよ。物を大切にできる子どもを育ててほしいの」とお祝いのメッセージが添えられていた。割れたら、買えば手に入る物が悪いとは思わないが、世界に一つしかないものを大切に使うということを教えるのも、その家の文化であると思う。そして、人の思いを受け取ることでできる人に育つのも、毎日の食事の中から学ぶことなのかもしれない。

助産院の食器棚には、祖母が愛し、大切に使っていた明治時代の食器が今も置いてある。新たな命に出会った時だからこそ、心も身体も幸せになる思い出の料理で癒されてほしい。どうぞ、ゆとりと助産院で私の手料理を心ゆくまで召し上がれ。